

鼓已乃以肉銜裏其表而炙之也と見えたり、是つゝむに肉と麵とかはり、熟せしむるに炙と蒸とのたがひはあるども、其製はまたく饅頭なり、されば此もの、諸葛氏より前にある事も亦明なり、饅神を祭るに始らざれば、人の頭にかたどりて、饅頭と名づけたりといひしも、ひがことなること論なし、今名義を考ふるに、饅は脣を覆ふ義ならん、明の趙宦光が說文長箋に、饅幕也、饅有覆義故从饅とあり、頭は宴會などの時、最初に出せる物の名にや、麵類を最初に出せる證は、宋の王闢之が澠水燕談錄云、士大夫筵饅、率以餌飪、或在水飯之前、予近預河中府蒲左丞會、初坐、卽食饅生餌飪、予驚問之、蒲笑曰、世謂餌飪爲頭食、宜爲群品之先可知矣、意其唐末五代亂離之際、失其次序明の胡侍が眞珠船に、今人宴終必薦粉羹、其來頗遠、遯齋間覽云、太祖内宴先令進粉、故名頭食、後人宴終方薦此味、蓋失其次耳、知新錄に、近世點心亦名曰頭腦とも、麩類よりうつれるにや、或人云、上に引る初學記の文に據れば、饅頭は専ら祭にのみ用ひて、宴席の食物ならねば、頭食の類とはいふまじくや、答ていはく、藝文類聚の束晳が餅賦に、若夫三春之初、陰陽交際、寒氣既濟、溫不至熱、子時享宴則饅頭宜設とあるにて、宴席にも用ひたるを知べし、附識す、知不足齋本游宦紀聞に、黃長睿云、饅頭當用饅字、見束晳餅賦とあり、盧文弨が跋に、此語を引て、今攷束賦中自作饅字、卽字書中亦無饅と云り、按するに、廣韻上平聲二十六桓部饅字の注に、饅頭餅也とあり、其下に饅字の注に俗とあり、饅は正字、饅は俗字なり、

(事物紀原九 酒醴飲食) 饅頭

小説云、昔諸葛武侯之征孟獲也、人曰、饅地多邪術、須禱於神假陰兵、一以助之、然饅俗必殺人以其首祭之、神則嚮之、爲出兵也、武侯不從、因難用羊豕之肉以包之、以麪像人頭以祠、神亦嚮焉、而爲出兵、後人由此爲饅頭、至晉饅謹祭法、春祠用饅頭、始列於祭祀之品、而束晳餅賦亦有其說、則饅頭疑自武侯始也、

[嬉遊笑覽十 上] 饅頭も職人盡にてうさいの詞に、さたう饅頭さいまんちうと有り、又饅頭賣が歌